

恒例2011年
お花見ウォーク
毒ガスと人骨
第6陸軍技術研究所跡地から
陸軍軍医学校跡地へ

主 催 : 軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会
連絡先 : 武藏野市中町3-6-21-103(鳥居方)
TEL 080-3157-1858 FAX 0422-36-4357
http://www.geocities.jp/technopolis_9073/
E-mail jinkotsu@yahoo.co.jp

コース

J R山手線大久保駅改札口

公営社	人骨が発見されてから、厚生労働省が納骨施設に納めるまで、保管場所として利用されていた葬儀屋。新宿区内の身元不明遺体を預かる所。	
梅屋庄吉屋敷跡	孫文の中国民主革命を経済的に支えた、日活の前身、Mバティー商会社長の梅屋庄吉の屋敷と撮影所がここにあった。	
国立科学博物館分館	人骨の鑑定人である佐倉朔先生のもとの職場	第6陸軍技術研究所跡地
東京都健康安全研究センター	90年代まで、毒ガスの研究をしていた施設の一部が残っていた	6研は、毒ガス兵器の研究を行っていた。環境省の調査によると、終戦直後、毒ガスがGHQに接収または焼却処分されているが、昭和30年7月、イペリット・ルイサイトの缶12個がここで発見されている。
陸軍境界石 射撃場土手跡	新宿区スポーツセンターや早大理学部、都立戸山公園大久保地区などがある山手線東側から明治通りまでの一带に戸山ヶ原射撃場があった。弾止め用の土手があつたが、流れ弾が多く、昭和期には7つのコンクリートドームが造られた。	
諏訪神社	明治天皇射的砲術展覧所址	
学習院女子大学	陸軍近衛騎兵連隊兵舎の一部は今も現存し、校舎として利用されている	
陸軍幼年学校跡	明治通りと都立戸山公園箱根山地区との間の崖上には、陸軍幼年学校があった	
都立戸山公園 箱根山	ここは山手線内でもっとも標高が高いところ。士官・下士官の教育機関・陸軍戸山学校があった。構内には陸軍軍楽学校もあり、野外演奏の跡地も残っている。箱根山をめぐると、戸山教会があるが、この建物の基礎部分は、陸軍戸山学校将校集会所の跡	
厚労省戸山5号宿舎跡	陸軍軍医学校防疫研究室の本部裏側の講堂等の跡地。2006年、元軍医学校看護師・石井十世さんが、この場所に人体標本類を遺棄したという話を聞いたという伝聞証言を、川崎次郎厚労大臣が聞き取り、発掘調査を約束した。昨年官舎が解体され、今年2月21日から発掘調査が始まった	
国立感染症研究所 (遺骨保管施設)	89年7月、国立予防衛生研究所(現感染研)建設現場から100体を超す人骨が発見された。厚労省は陸軍軍医学校の医学標本であることを認め、02年3月、敷地内に、納骨施設を建立した。	陸軍軍医学校 1929年、麹町にあった陸軍軍医学校が同地に新築移転し、天皇が行幸(訪問・見学)する。感激した小泉親彦は、翌年天皇行幸記念碑を造る。因みに、当時教官だった小泉は、後に校長、陸軍軍医総監、陸軍省医務局長、敗戦時は厚生大臣と、常に731部隊・石井四郎の後ろ盾となるが、最後は自決する。
財務省若松住宅児童公園	石井十世証言にある第3の人骨問題の現場。軍医学校診療部(済生会病院)の跡地だったが、ここに石井さん自身も手伝って人体標本類を遺棄した。	
国立国際医療研究センター	旧臨時東京第一陸軍病院。戦後は国立第一病院としてスタートする。旧陸軍軍医学校第7・12代校長は森鴎外。校長の使用した机や顕微鏡が、待合室に展示されている。同所には第5福竜丸の模型もある。	

コース解説

① 公営社

最近はコリアタウンとして、全国的にも有名になった大久保通り近辺。江戸時代には江戸城の西の守りとして百人組鉄砲隊が居住していた場所です。この大久保通りを新大久保駅から大久保駅に向かって少し歩くと、右側に公営社という青い看板の葬儀屋があります。



公営社



遺骨が置かれた地下室
ここで鑑定された

1989年7月22日、国立予防衛生研究所建設現場で大量の人骨が発見されました。近隣の弥生式住居址の調査をしていた戸山遺跡調査会は、埋蔵文化財ではないと判断し、牛込警察署に通報しました。そこで四体が科学捜査研究所にまわされ、残りは新宿区が墓地埋葬法に則り、身元不明の遺体として区内の葬儀社・公営社に保管されることになりました。（後に科捜研にまわった人骨は5体分と判明、他の骨と一緒に公営社に預けられる。）

その後、時の新宿区長・山本忠克氏（故人）は議会で独自鑑定を約束し、糺余曲折を経て、91年9月、札幌学院大学の佐倉朔（さくらはじめ）教授（形質人類学）に鑑定を依頼しました。鑑定は公営社の地下保管室で半年かけて行われ、個体数は前頭骨だけで62体、アジア系の外国人のものが多数混在しており、銃創、刺創などもあることが分かりました。



15才の少年



死後銃創痕

鑑定後、厚生省（当時）は土地管理者として調査を開始し、逆に新宿区は、区長が代わっていたこともあり、人骨の焼却埋葬を主張しはじめます。92年3月30日に「戸山人骨の鑑定報告書」が完成すると（一般への公表は4月22日）、新宿区は翌年度から毎年人骨焼却予算を計上し始めました。

96年10月16日、731部隊の犠牲者遺族、敬蘭芝さんと娘さんの郭曼麗さんが、自ら起こしている国家賠償請求訴訟の原告として来日した際、新宿区役所を訪れ、遺骨の保管と身元調査を求めました。その後、公営社地下室に段ボール箱に詰められて保管されていた人骨は、14箱の桐箱に移されました。「人骨」が「遺骨」になった瞬間です。

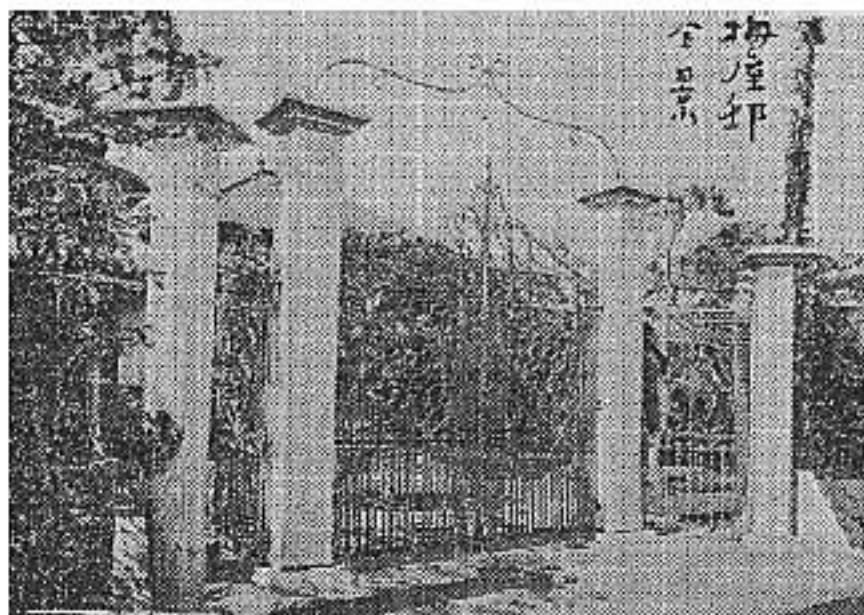
② 梅屋庄吉屋敷跡

中国革命の父孫文と日活の前身・Mパティー商会設立者梅屋庄吉は刎頸の友。梅屋は孫文に革命を成功させるため「君は兵を挙げよ。我は財を挙げて支援す。」と盟約しました。

上海で映画興行を手掛けて大儲けした梅屋庄吉は、東京で活動写真制作・配給会社・Mパティー商会を設立。1909(明治42)年に、大久保百人町(現・新宿区百人町2丁目)に約5000平米の土地を購入し、撮影所と邸宅を建てました。革命家孫文と英文秘書を務めた資産家の娘宋慶齡の結婚式は、歳の差や前妻との問題などから周囲から反対されたため、梅屋邸でささやかに執り行われたそうです。



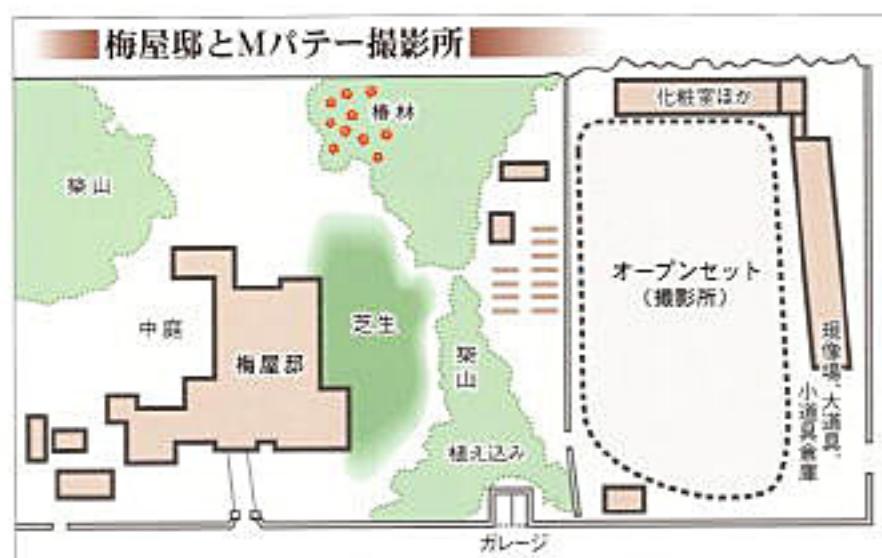
梅屋庄吉・トク夫妻と孫文



梅屋庄吉邸 正門



孫文と宋慶麗



梅屋邸の広さは、車田によれば1万平米だが、本文の5000平米は、読売新聞西部本社編の記述によった

参考文献 国父孫文と梅屋庄吉 中国に捧げたある日本人の生涯

盟約ニテ成セル 梅屋庄吉と孫文

車田譲治/国方千勢子述 六興出版
読売新聞西部本社編 海鳥社

③ 国立科学博物館分館

89年8月、新宿区は、区長、区議会一体となって厚生省（当時）に人骨の身元確認を迫りますが、厚生省は国立栄養研究所名で3度にわたって拒否回答をし

ました。これに対して当時の山本区長は、9月21日の

新宿区議会本会議で、独自鑑定に取り組むという歴史的決断を表明したわけですが、その後、新宿区が鑑定を依頼すると、学者本人に内諾を得ても館長や大学名で断られるという、奇妙なことが続きました。

究明する会でも、当時国立科学博物館人類学研究室に勤務していた形質人類学の第一人者、佐倉朔先生と接触を図ってきましたが、結局研究室を退任し札幌学院大学に移った91年まで、鑑定を待たなければならなかったという経緯がありました。

また、佐倉先生の後任として現在国立科学博物館人類学部長を務めていた馬場悠男先生（定年を迎え、今年度から嘱託）は、99年7月17日に開催した人骨発見10周年で講演し、今後、DNA鑑定だけでなく細胞に含まれる炭素や窒素の同位体など、科学鑑定の手法が系統的に進歩すれば、発見された人骨の由来確認にも役立つ可能性があることを示唆しました。



佐倉教授（2002.7.21）



馬場教授（左 1999.7.17）

④ 東京都健康安全研究センター

国立科学博物館分館に隣接して都立衛生研究所（現健康安全研究センター）がありました。1990年くらいまで、旧軍の第6陸軍技術研究所の建物を使用していましたが、老朽化に伴い、建て直しが決まりました。毒ガスを扱った研究施設の跡地なので、当時の事務長だった中山弘子氏（現新宿区長）が、解体工事の際、聞き取りや試掘調査などを行ったところ、空の塩素ボンベが出てきたそうです。跡地はしばらく放置されていましたが、近年、ようやく新館建築工事が始まっています。



⑤ 陸軍技術本部・第6陸軍技術研究所

国立科学博物館分館・東京都健康安全センターを含む、山手線を挟んで西側一帯の戸山ヶ原演習場敷地内には、陸軍の各種兵器・技術の研究・開発を行う施設が建設されていました。

兵器の研究調査・教育を担うため、1903(明治36)年、砲兵会議と工兵会議を統一して陸軍技術審査部が設置されました。1919(大正8)年には陸軍科学研究所を管下において陸軍技術本部が設置され、1942(昭和17)年には陸軍兵器行政本部に改組されました。その下に10の研究所が設置されましたが、第6・7技術研究所がこの地にあり、このうち、第6技術研究所が、化学兵器の研究を行っていました。因みに、第7研究所は、物理的基礎研究を担当、具体的には、誘導ミサイルや輸送用潜水艦などの開発を行っていました。

化学兵器（毒ガス）の研究は、陸軍軍医学校軍陣衛生学教室でも研究され、開発を提唱した小泉親彦は、毒ガス研究が6研に一本化された後は、石井四郎の後ろ盾として生物兵器（細菌兵器）の研究に突き進んでいきます。

科学研究所の出張所として第9研究所が設立されたのは、1937(昭和12)年のこと。毒ガスを扱っていたのは第6、第8、第9研究所、第8は小金井、第9は登戸にありました。

戦後、6研の跡地には都立衛生研究所、国立科学博物館分館、社会保険庁中央病院などが建てられました。環境省の調査によると、終戦直後、毒ガスがGHQに接収または焼却処分されていますが、昭和30年7月、イペリット・ルイサイトの缶12個がここで発見されています。

⑥ 陸軍戸山ヶ原射撃場



陸軍境界石

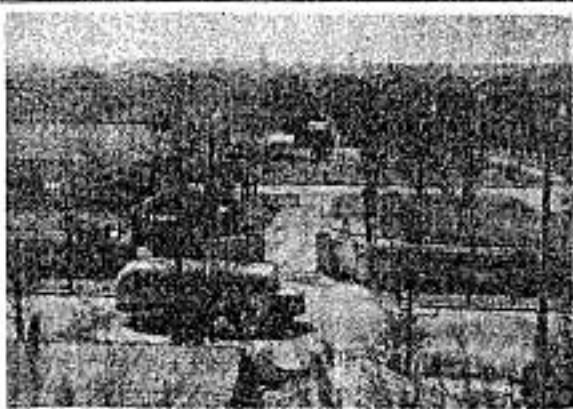


射撃場で射撃訓練

山手線東側から明治通りまでの一帯は陸軍によって射撃の練習に用いられ、大久保射撃場、戸山ヶ原射撃場などと呼ばれました。弾止め用に周囲には土手が張り巡らされ、三角山と呼ばれていました。明治・大正期には、普段は公園として市民に開放され、ハイキングやゴルフに興じる人々もいました。しかし訓練の回数が増えるに従い、流れ弾が民家に届くなどの問題が生じるようになりました。昭和2(1927)年から3(1928)年にかけて、長さ300メートルの鉄筋コンクリートのトンネル式射撃場7

棟が造られました。これは巨大なかまぼこ型の土管のような形で、その異様な姿は人々に気味悪がられたといいます。

1953年4月15日(水) 朝日新聞



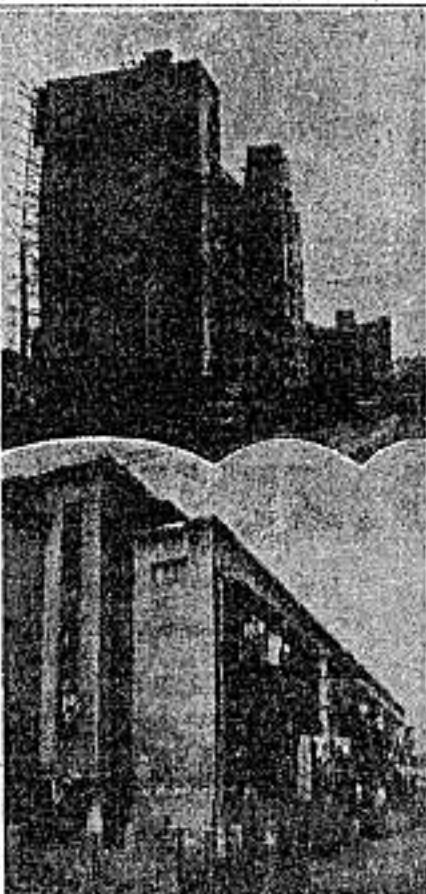
監督軍の突撃射撃官になっていたも門山ヶ東旧撲滅射撃場

銃声にとぎれる講義

芦山高校文教地区は夢か

卷之三

アパートにもいろいろ
役所のサタも金次第



四十年の「捕物帳」に幕
田多羅さん官界を去る



卷之三

戸籍調べは困る

射撃場は、戦後、米軍が接収、使用していました。朝鮮戦争の頃から射撃訓練が激しくなり、昭和28年4月15日付の朝日新聞（右）に「都心にもあった基地」として批判されるほど。結局、同年7月に訓練施設は朝霞に移転され、同地は戸山公園として生まれ変わりました。

現在は、早稲田大学理工学部、新宿スポーツセンター、都立戸山公園などになっています。

諏訪通りを隔てて反対側の高台に存在する諏訪神社から射撃場が一望の下に見渡せ、諏訪神社境内には、「明治天皇射的砲術天覧所址」の碑が建立されています。



明治天皇射的砲術天覧所址

⑦ 陸軍近衛騎兵連隊

かつての兵営正門 ➔連隊の営門があったあたりは、今日では学習院構内から除外されている。ごらんのように一帯は公園となっているが、そこには往時を偲ぶよすがはまったくない



参考文献 近衛騎兵聯隊写真集 近衛写真集編纂委員会編

諏訪通りを進んだ先にある現在の学習院女子大学や都立戸山高校近辺は旧近衛騎兵連隊跡地です。近衛兵は、宮城の守衛、儀仗、供奉などに任ずる兵で、全国から品行



旧近衛騎兵連隊兵舎跡



旧近衛騎兵連隊炊事場跡

方正・体格良好な優秀者を選抜しました。学習院女子大学構内には、戦前からの桜並木が残っており、その傍らに4号館と呼ばれる2階建の赤煉瓦の建物が当時の兵舎、C館と呼ばれる平屋建が当時の炊事場・風呂場でした。因みに、前掲新聞記事に出てくる戸山高校（旧制府立四中）は、戦前は市ヶ谷加賀町にありましたが、東京大空襲で焼け落ち、紆余曲折を経て1949年に、近衛騎兵連隊の馬小屋跡に新築移転しました。

⑧ 陸軍幼年学校

陸軍幼年学校とは、陸軍が士官学校進学者のために設立した全寮制の中学校です。1871（明治4）年、大阪から東京に移転した陸軍兵学寮が、翌年改組、士官学校の予科として幼年学校が設置されます。1887（明治20）年に士官学校から独立して陸軍幼年学校（3年制）になり、日清戦争後の明治29年、中央幼年学校（2年制）の下に地方幼年学校（3年制）が設置されました。市ヶ谷台の士官学校と同じ敷地内にあった東京幼年学校は、手狭になって、1921（大正10）年、陸軍戸山学校敷地内（近衛騎兵連隊の北側）に新設された校舎に移転します。

大正時代の後半（1923年以降）は大正デモクラシーと世界的な軍縮の流れに対応し、陸軍の近代化を図るという目的もあって、地方幼年学校の廃止が相次ぎました。士官学校には幼年学校の卒業生と中学校の卒業生が入りましたが、両者の仲は頗る悪く、特に純粹培养の幼年学校出身者が、中学校出身者をバカにしていたそうです。陸軍は必死に幼年学校を守る中で、昭和に入ると形勢逆転し、1931（昭和6）年に柳条溝事件、1936（昭和11）年にはロンドン軍縮会議を脱退し、地方幼年学校も次々に復活、やがて陸軍部の要職をすべて幼年学校出身者が占めるようになります。日中戦争、太平洋戦争へと突き進みます。

戸山にあった東京幼年学校は、拡張し続け、かつ運動場を戸山学校と共有するなど、近衛騎兵連隊を含め、近隣の陸軍関係施設と共に存共栄の関係がありました。



拡張後の戸山全景、手前 戸山学校、右上 大久保射場

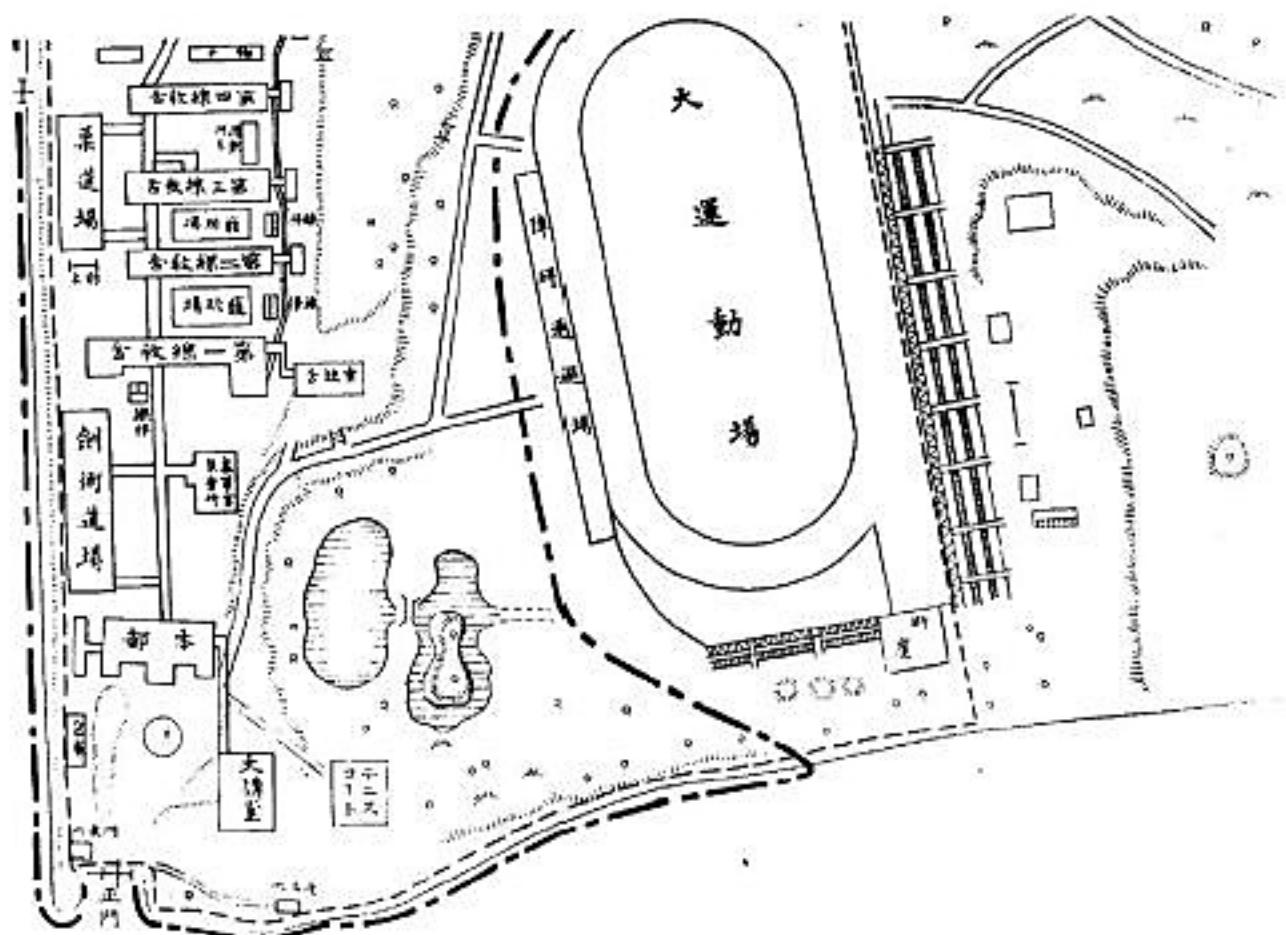
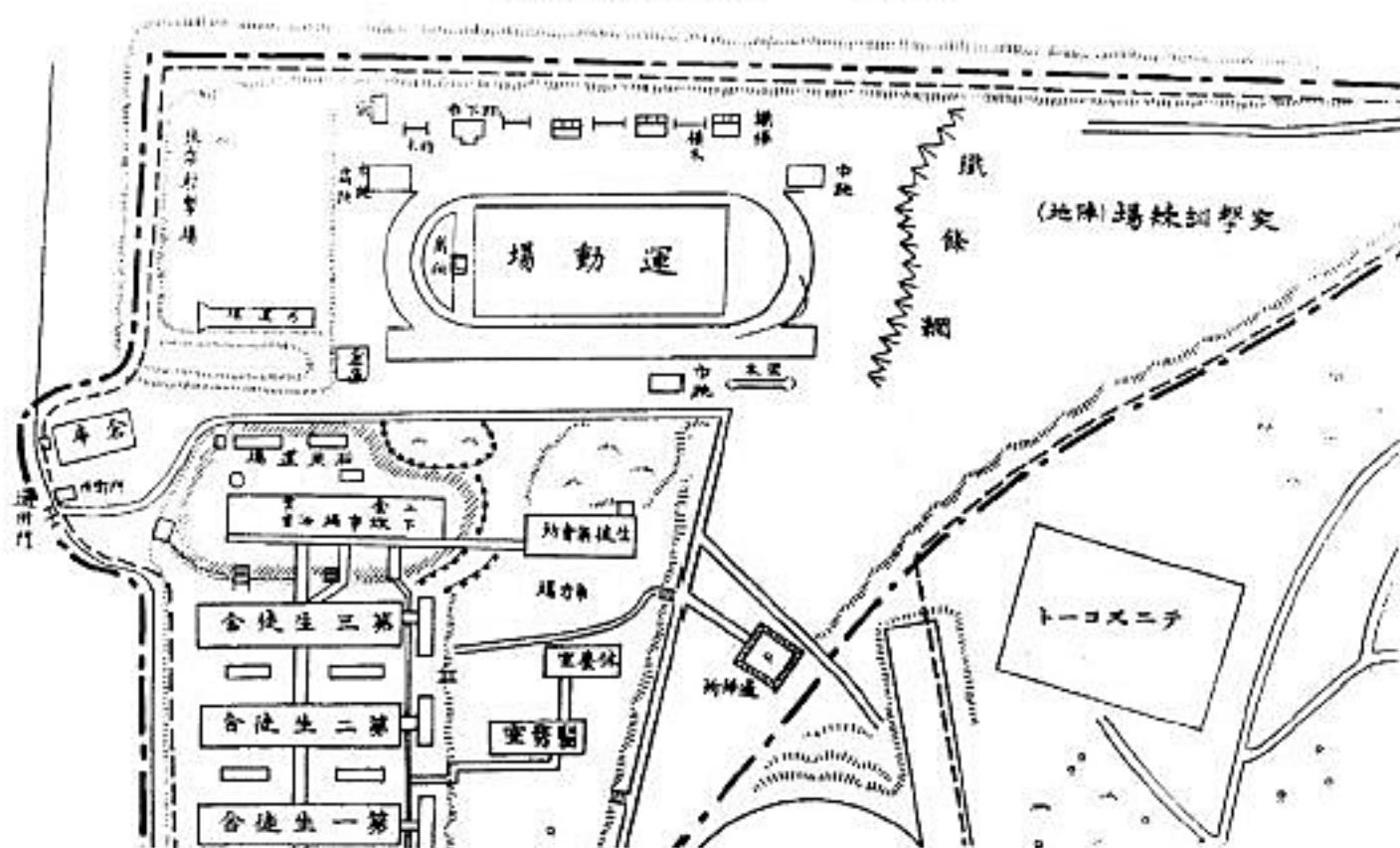
参考文献：東京陸軍幼年学校史 わが武寮 東幼会編

陸軍幼年学校体制の研究—エリート養成と軍事・教育・政治—

野村理栄子著 吉川弘文館

東京陸軍幼年学校（戸山）

昭和14年



⑨ 陸軍戸山学校・軍楽学校



陸軍戸山学校記念碑

運動公園から箱根山に登ると、旧市内で最も標高の高い44.6mの築山の頂上にでます。ここから眺めると眼下に戸山ハイツが広がりますが、この一帯には陸軍戸山学校がありました。明治6年陸軍兵学寮戸山出張所が置かれ、各地の上・下士官を招集し、陸軍全体の教育を統一しました。明治7年に戸山学校と改称し、戦術、射撃、体操剣術などの教育・研究をしました。

校内には軍楽学校も併設され、野外音楽堂は箱根山のふもとのすり鉢状のくぼ地になりました。（陸軍軍楽隊史—吹奏楽物語り— 山口常光編著）



戸山野外演奏場より夜間中継放送（辻学長指揮、昭2・7）



演奏場址に造られたモニュメント

また、戸山学校の遺跡としては、唯一、将校集会所が残っています。戸山教会の地下部分です。そこで教官が集まったり、教程などの印刷物を制作していました。将校会議室という呼び方もあるようですが、正式には「集会所」の方が良いと思います。

元軍医学校看護師石井十世さんの証言によると、終戦間際には、市ヶ谷の大本營から陸軍の幹部たちが集まってこここの会議室を使用していたそうです。



戸山教会の正面。左側に地下部分が見える



北側から見ると将校集会所の壁が

⑩ 陸軍軍医学校防疫研究室

1932(昭和7)年、欧米視察から帰国した軍医学校教官・石井四郎の意見具中により、防疫部地下に防疫研究室が新設、翌年、近衛師団軍医部長・小泉親彦の支援の下に、隣接する近衛騎兵連隊敷地の譲与を受け、鉄筋コンクリート造り二階建ての防疫給水部本部に発展します。本部を中心に、講堂、事務室、動物舎などを含み、敷地面積約5千坪を占め、軍医学校の中にあって厳重に管理され、自由に行き来できない場所だったということです。そして、この防疫研究室こそが、生体実験・人体実験を通して細菌戦の研究・開発をしていた731部隊をはじめとする防疫給水部隊と、日本の医学アカデミズムをつなぐ、ネットワークの中核機関でした。731部隊の部隊長・石井四郎は軍医学校教官(1932年以降)でもあり、防疫研究室主幹(1934年9月以降)でもありました。

現在は、この一帯は都立戸山公園箱根山地区運動公園になっており、毎日子供たちがサッカー、野球、ゲートボールに興じています。

文庫版「新版・続悪魔の飽食」(森村誠一著)の99ページには、戦後、大量の医学標本を遺棄したとあります。当時軍医学校で看護婦をしていた石井十世さんの証言から、現在この一画にある厚生労働省敷地・戸山5号宿舎の辺りがその場所と考えられています。

この新たな人骨問題に対し、2006年6月5日、川崎二郎厚生労働大臣(当時)は、国会答弁で発掘調査を約束し、同月23日、証言者である元軍医学校看護師・石井十世さんの聴き取り調査を行いました。

文庫版「新版・続悪魔の飽食」(森村誠一著)の99ページ →

防疫研究室(軍医学校五十年史より)



99 第二章 七月一一部隊をめぐる米・ソの4

終戦とともに、多数の研究者、教育隊少年隊員が動員され標本の処分が急がれた。防疫研究室の裏手にあった空地に、深さ十メートルの大きな穴が掘られ、防疫研究室に陳列されていた多数のホルマリン漬け人体標本が、ガラス瓶ごと投げこまれた。関係者の証言によれば「人体標本の処分作業は八月十五日以降、一ヶ月かかった」という。

「穴の広さは十五メートル四方、深さは十メートル、三階建ての家屋がすっぽり収まりそうな深さだった。穴掘りが完成すると同時に、人体標本を入れたガラス広口瓶、バラフィン処理を施した人体組織標本が何百個も穴の底に投げこまれた……ミイラの人体標本は投げこまれたところを、東京帝大医学部からきた人びとによって再び拾い上げられ、帝大へ持ち帰られたと記憶している……標本の中には高橋お伝の藏器もあつたが、これは警視庁が持ち去った」とは関係者の話である。



厚生労働大臣室にて（中央が石井）

石井さんは郡和子代議士に付き添われて川崎次郎厚生労働大臣に呼ばれ、大臣室で証言をしました。その要旨は以下の通りです。

＜松下菊松さんの宿舎付近（戸山ハイツ八号地第二住宅、現在の国立国際医療センター戸山五号宿舎付近）について＞

「陸軍軍医学校防疫研究室の周辺と松下菊松さんの宿舎付近、その前のがけのところに人体標本を埋めたと聞いています。松下さんは進駐軍に掘り出されたら困るので、木造の宿舎を建てて国立東京第一病院の医長クラスの人たちに住んでもらい、監視の意味もあって自分も住んだといってました。」

昨年(2010年)10月から11月の間に戸山5号宿舎の解体工事が行われ、今年(2011年)2月21日から、人体標本類の発掘調査が始まりました。3月27日現在、人体標本類こそまだ見つかっておりませんが、講堂跡と思われる、当時の建築物の遺構が発見されています。



厚生労働省戸山5号宿舎
(国立国際医療センター看護部)



コンクリート基礎の構造



「督校」と書かれた茶碗

2011年2月23日(火) 日経新聞(左)、東京新聞(右)

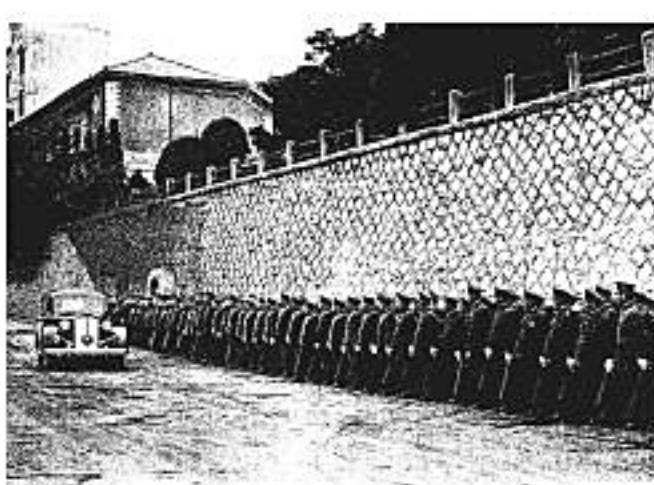
⑪ 陸軍軍医学校

昭和4(1929)年、陸軍戸山学校の敷地内に東京第一衛戍病院、陸軍軍医学校、牛込恩賜財団済生会病院が開設されました。

軍医学校は、明治3年に大阪軍事病院内に設立し、明治5年に東京軍医寮及び軍医寮学舎に引き継がれます。明治10年にはいったん廃止されますが、明治19年に陸軍省内に軍医学舎が改めて設置され、明治11年に麹町区富士見町に軍医学校が新築・開校します。昭和4年になると、老朽化や震災の影響もあって、戸山に新築移転します。



軍医学校正門（東海林氏寄贈）



軍医団雑誌第283号口絵（東海林氏寄贈）

軍医学校では、医科大学卒業生で軍医を志す者に軍陣医学(軍医特有の医学)を講習することを主な目的とし、軍医の育成・教育と研究を行っていました。因みに第7代、第12代校長は森林太郎（森鷗外）、第28代校長は小泉親彦です。

軍医学校の研究は、例えば本部北側の軍陣衛生学教室では化学兵器の研究をしていました。因みにその建物は最近まで残っており、国立栄養研究所が利用していました。



軍陣衛生学教室の試験動物舎



国立栄養研究所（昭和8年撮影）



天皇行幸記念碑

(昭和5年小泉親彦建立)



射撃試験（手術練習室）



済生会病院

昭和 60 (1984) 年、**国立栄養研究所・旧国立身体障害センター**の敷地を再開発し、**国立予防衛生研究所**(現**国立感染症研究所**)、**病院管理研究所**、**国立栄養研究所**の 3 研究機関を合築し、戸山研究庁舎を建設することが決定され、工事に入りました。工事中区域内から土器が発見され、弥生式住居跡ということで東京都教育委員会を中心に戸山遺跡調査会が組織され、発掘調査が行われていました。

参考文献 陸軍軍医学校五十年史 陸軍軍医学校編



国立感染症研究所（戸山研究庁舎）

⑫ 人骨発見現場

1989年7月22日、その近隣、当時の本部北西、標本図書室と防疫部（軍陣病理学教室）の間から大量の遺骨が発見されました。その後は前述(3ページ)のような経過を経て、2001年6月、厚生省の調査報告書が公表されました。

そこで**旧陸軍軍医学校**の関与を認め、遺骨が発見された近くに遺骨保管施設を造って、今後の再調査の可能性を含み、現状のまま弔意をもって保管することを決定しました。そして、2002年3月、戸山研究庁舎敷地内北側に御影石造りの立派な納骨施設が完成し、雨の中、納骨式が行われました。



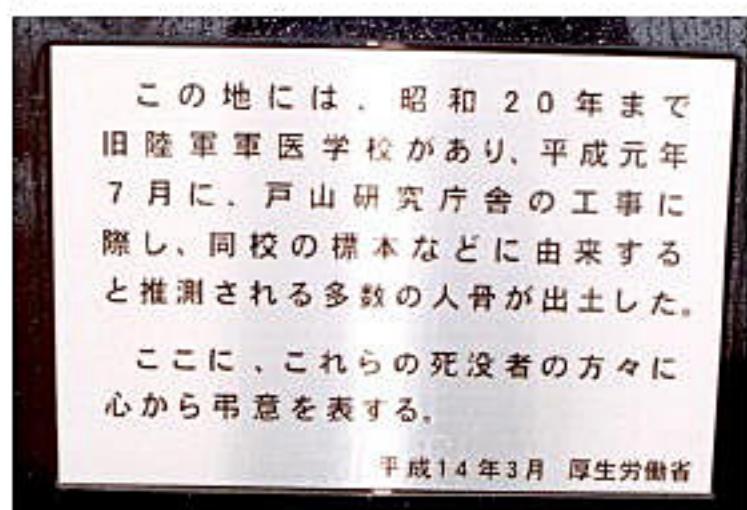
ドリルによる穿孔



四肢骨（大腿骨）意味不明の鋸断痕



御影石づくりの納骨施設



納骨施設に刻まれた碑文

⑬ 陸軍軍医学校の石垣と地下道（歴史の隠蔽？）

戸山研究庁舎の前の通りを国立国際医療センターの方にしばらく行くと、新宿障害者センター、戸山サンライズ等がありますが、その向かいの医療センターの石垣に、一部埋められたような跡が残っています。軍医学校と防疫研究室の間は地下道でつながっていました。恐らくその入り口だろうと思います。つい最近までブロックが積まれ突き出ていましたが、97年に埋められ、現在のようになりました。

さらにその先の財務局若松住宅に入る道端に、車止めのような石塊が見られます。ここには以前は「医校会」と記されていましたが、人骨が発見された直後、「医療センター」「駐車禁止」などと書き直されました。



1994. 3. 21



1996. 4. 7



1997. 4. 6



現在の石垣（14ページの軍医団雑誌口絵と比較すると当時の石垣がそのまま残っているのがわかる）



門衛付近にあった石柱
(88年撮影・常石)



89年に人骨が発見された直後、書き換えられた

⑭ 新たな人骨問題

陸軍軍医学校の南側には、済生会病院がありました。但し、陸軍軍医学校の診療部に統く形でその敷地内にあったので、はっきりとした区別はついていなかったと思います。

戦後は、陸軍施設は厚生省に移管され、軍医学校の一部は国立東京第一病院の敷地になりました。現在、財務省若松住宅内にある児童公園の辺りに新たに人骨（人体標本）



取り壊しが決まっている
財務省若松住宅



若松住宅内の児童公園

が埋まっているらしいことがわかりました。前述の石井十世さんが2006年、以下のような、新たな証言をしたのです。今後の発掘調査が待たれます。

〈口腔外科の技工室の前〉 「空襲で焼け残った陸軍軍医学校の建物に整形外科で使っていた建物（済生会病院の横）がありました。戦後、国立東京第一病院になってから、その建物に産婦人科が入りました。私は東一病院になってから、産婦人科に移りましたので、その建物で仕事をしていました。その建物の南はしに口腔外科で使用していた技工室がありました。人体標本は技工室の前に穴を掘って埋めました。ガラス瓶から標本を取り出して埋めました。私が手伝いましたからよく覚えていています。」

⑯ 国立国際医療研究センター



現国立国際医療研究センター内に展示されている
軍医学校の教官用机と顕微鏡。森鷗外も使用した



第5福竜丸模型（無線長・久保山愛吉さ
んはこの病院で亡くなった）

陸軍所属の東京第一衛戍病院が現在地に新築移転したのは1929(昭和4)年。1936(昭和11年)に東京陸軍第一病院、38年に臨時東京第一陸軍病院と改称、そのまま敗戦を迎え、戦後は厚生省に移管し、国立東京第一病院と改称します。1954(昭和29)年3月に第5福竜丸が水爆実験で被爆し、乗組員16名が入院しました。久保山愛吉さんは亡くなりましたが、他の患者は無事退院、記念に模型(写真)を寄贈しました。同じ場所には、軍医学校関係の展示も見られます。

同病院は、74年に国立医療センター、1993年に国立国際医療(研究)センターと改称し、現在に至っています。